



## 分科会 6 誕生、スポーツファーマシスト —ドーピング防止活動に薬剤師職能を活かそう—

### W-06-03 ドーピング防止活動の実践—病院薬剤師の立場から—

おおつか さちこ  
大塚 祥子

NTT 東日本長野病院薬剤科 薬剤主任

本年4月、いよいよ第一期となる「公認スポーツファーマシスト」が誕生した。私もその一人として基礎講習会、都道府県単位の実務講習会に参加し、自分以外のスポーツファーマシストを目指す薬剤師とも意見や情報交換を行う機会を得た。その後、知識到達確認試験を経て、「認定証」を受け取り、ここからが本当の意味での「公認スポーツファーマシスト」のスタートであるという思いを強くした。この制度が薬剤師とスポーツ界を結ぶ新たな架け橋となるために、多くの薬剤師が「公認スポーツファーマシスト」活動に期待を持って臨もうとしている。

「公認スポーツファーマシスト」は最新のドーピング防止規則に関する正確な情報・知識を持つ。競技者を含めたスポーツ愛好家に対し、薬の正しい使い方の指導、薬に関する健康教育などの普及・啓発を行い、スポーツにおけるドーピングを防止することを主な活動とする。この活動はスポーツが対象という特殊性を除けば、私たちが日常業務の中で行っている「薬物の適正使用」を目的とした活動につながる。

新しい分野の活動を通して「薬剤師」を広く知ってもらおうと共に、活動に当たってはスポーツ現場のニーズに応じていくことが求められている。薬剤師が「薬の専門家」であることは世の中で認められているが、果たしてドーピング防止活動のために「役立つのか」は、アスリート、監督・コーチ、スポーツドクター、トレーナーといった他職種の人たちにまだまだ理解されていないのではないかと感じる。また、私たち薬剤師もこれらの人たちに対しどんな情報をどう提供していったらよいのかがよく分からず、迷っているのではないだろうか。

このことは病棟で薬剤管理指導業務を始めた頃、私を感じた病院薬剤師としての「心細さ」に似ている。医療チームの中で薬剤師としての役割を「患者のためにできること」から考え、こつこつと積み上げていく。患者はもちろん共に働く医師・看護師などの他職種とコミュニケーションをとりながら、何を求められ、どう応えていけばよいのか常に把握する。この積み重ねが、結果的には患者に薬剤師が必要であるという認識を持ってもらうことが出来、当初あった「心細さ」を無くし、自身の活躍の場を拡げることにつながった。

スポーツファーマシストもネットワークとコミュニケーションを軸に、他からの求めに対しアンテナを高くして臨むことが大切である。また始まったばかりのこの制度を定着させるために、薬剤師同士がネットワークを構築し共に協力していくことを、よりいっそう強めていくことが必要となる。特に迅速な情報提供や、難しい判断を迫られるスポーツの現場では一人の力で応えることが難しい場面が多くみられる。薬剤師という職能を高めていくためにもこうした協力は不可欠であり、そのための体制作りも意識して構築していく必要がある。

生まれたばかりのスポーツファーマシストに期待される役割は大きい。これをプレッシャーではなく、ワクワクした思いに変えているいろいろな立場の薬剤師が協力してこの制度に臨むことが必要だと私は考える。スポーツを通して「薬剤師」の可能性を広げるチャンスがやってきた。この制度を大きく育てていくために今何が必要なのかを私たち「薬剤師」が考え、実行していくことが求められている。